

指名コンペティションの結果について

第 18 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展—日本館キュレーター指名コンペティションにおいては、6 名の候補者に参加を依頼したところ、その全員からご提案をいただき、最終選考の結果、大西麻貴氏がキュレーターに選出されました。

氏名	展覧会テーマ
大西 麻貴（一級建築士事務所 大西麻貴+百田有希/o+h 共同主宰）	愛される建築を目指して
腰原 幹雄（東京大学生産技術研究所 教授）	大工と構造家 Non-Engineered and Engineered
杉本 博司（株式会社新素材研究所 代表取締役）	白井晟一 原爆堂 Temple Atomic Catastrophes
田根 剛（ATTA - Atelier Tsuyoshi Tane Architects 建築家）	LOST MODERN : 近代の喪失 —建築はこの先、生き残れるか—
西牧 厚子（新建築社『新建築住宅特集』編集長）	アーカイブを駆動せよ 建築雑誌 100 年から浮かび上がるコンステレーション
原田真宏 / 原田麻魚（株式会社マウントフジアーキテクトスタジオ 一級建築士事務所、芝浦工業大学建築学部建築学科 教授（原田真宏））	大きさについて m3:kg

（候補者氏名五十音順、敬称略）

選考委員会の講評は次頁のとおりです。

選考委員会（敬称略・五十音順）

委員長： 三宅 理一 （東京理科大学客員教授）

委員： 秋元 雄史 （練馬区立美術館館長、東京藝術大学名誉教授）

五十嵐 太郎 （東北大学大学院教授）

ウスビ・サコ （京都精華大学 全学研究機構長、人間環境デザインプログラム 教授）

松岡 恭子 （(株)スピングラス・アーキテクト代表取締役）

講 評

令和5年(2023年)に予定される第18回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展の日本館展示を実施するにあたり、建築展事業委員会において展示キュレーター候補者(以下、「候補者」という)を絞り選考を行った。

その手順は2段階の選考のかたちをとる。第一段階として先に指名された推薦者からの候補者推薦を受け、書類選考(第一次審査)を行った。その結果、6名の候補者が絞り込まれ、その全員がコンペティションによる第二次審査への参加希望を表明したことで、それぞれが企画提案書を提出し、第二次審査を行った。その際、本建築展事業委員1名が候補者と利害関係者にあたる事が判明し、第二次審査では審査のすべてのプロセスから外れ、5名の委員によって選考が行われた。候補者は以下の通りである(選考委員1名ならびに候補者1名はオンライン参加)。

(候補者氏名五十音順、敬称略)

- (1) 大西麻貴
- (2) 腰原幹雄
- (3) 杉本博司
- (4) 田根剛
- (5) 原田真宏 / 原田麻魚
- (6) 西牧厚子

第二次審査において、各候補者は選考委員5名を前にそれぞれ40分のプレゼンテーション(発表・質疑応答)を行い、6名全員のプレゼンテーションが終了した後に、選考委員の間で最終選考を行った。

以下、第二次審査の議論の要点を記す。

腰原幹雄氏の案「大工と構造家」は、我国の伝統建築をリードしてきた大工と今日の木質化に深くコミットする構造設計者に焦点を当て、木造文化の流れと未来への見取り図を示すものである。日本の木造をグローバルなコンテキストで解釈し紹介するもので、その視点は今日の木質化の動きに連動し、特に日本で進められている木造の構造技術を海外の人々にわかりやすく伝える内容となっている。ただ、ビエンナーレで主導的な役割を果たしてきたスイスなどアルペン諸国や北欧諸国がこれまで木質化を全面的に取り上げていることもあり、制度面で遅れている日本の木質化の現況を伝えることにどれだけの意味があるのか、あるいは構造家の人選がひとつの大学に固まりすぎていないか、という意見も出た。内容的には完成度が高く、ビエンナーレではなくともぜひとも海外で実施してほしい内容である。

大西麻貴氏の案「愛される建築を目指して」は、個から出発した小さな共感の輪が次第に全体を包摂していくという新たな場所づくりの方法論を、ビエンナーレ会場を具体的な場として実践していくものである。多様性を求めるために分野横断的なチームをつくり、セラミック、テキスタイルなどの素材による日本館の「リノベーション」と、階下のスペースを使ったコミュニティ・カフェの場づくりを行い、その上でふわふわとした生き物のような居場所をつくるというものである。その大胆さ、面白さは選考委員の共感を呼んだが、日本から大量の物資を輸送するこの案に限られた予算内で実現可能か、欧州内での場のネットワークが半年間の会期中にどの程度広がりうるかといった質問も寄せられた。また「愛される建築=architecture that is loved」という言い回しについても違和感を覚えるという指摘もあった。love とか amour を安易に用いるよりは、「かわいい」といった語と同様、そのまま日本語で発信すべきなのだろうか。

西牧厚子氏の案「アーカイブを駆動せよ—建築雑誌 100 年から浮かび上がるコンステレーション」は、建築雑誌の編集者でもある候補者の視点で、この 100 年の間で建築雑誌が作りあげてきた情報の蓄積をアーカイブとして位置付け、それを日本館の中で星座のごとく散りばめるといった内容である。階上での 12 のテーマに沿ったグラフィックな展示を通して我国の近現代を表すとともに、階下では既にデジタル化された 100 年分のデータへのアクセスを介し、体験的かつデジタル的に日本の建築へのアプローチとする。世界の建築界の中でも「アーカイブ化」がきわめて遅れている日本で、このような取り組みは重要であり、言語の壁もあってなかなか日本建築の真髄に辿り着けないという海外からの指摘に対し、このような機会に雑誌に特化したアーカイブをつくることは大いに歓迎したい。ただ与えられた準備期間にこの膨大な作業のどこまでが実現可能なのか、あるいは、多くの建築雑誌が刊行されてきた中で「新建築」に偏りすぎていないか、という指摘もあった。日本語の媒体が中心となるので、見せ方にも問題があるとの意見も出た。

原田真宏・原田麻魚（マウントフジアーキテクト）の案「大きさについて m3 kg」は、建築の尺度に対する新たな提案を介して日本の建築的所作の一部を切り取り、今日的な問題を即物的に展示するものである。欧米各国で議論され導入されている脱炭素のため施策は、日本はまだ途上であり、建築界での共通認識は果たされていない。そうした状況に対して、イームズ的な大きさの概念を炭素量に置き換え、kg-Co2, m3-wood という尺度を用い、実際のものとして可視化、空間化する。考え方としてはきわめて斬新であり、欧米の脱炭素的な思潮に慣れた観衆に対しても、手触りをもって伝えることができる。特に日本の木質建築をグローバルなコンテクストに置き、未来に向けてその「炭素的」な理解を促進するという意味で、今回のビエンナーレの総合テーマとも対応する。ただ、発表案では展示の実現にあたっての具体的な手法、さらには半年にわたる会期中における具体的なプログラムでの詰めがなされておらず、その点が減点の対象となった。

田根剛氏の案「Lost Modern - 近代の喪失- 建築はこの先、生き残れるか」は、日本国内における近現代建築の急速な取壊し、建替えに対する警鐘として、その実像を展示するとい

う内容である。重要と目される近現代建築の模型の展示が基本となるが、半年の会期中のそれを少しずつ壊していくというある種の動態展示、その時間を共有することで失われゆく近代の都市景観に対するオマージュとする。一見さりげない展示であるが、それぞれの建築物にナラティブをつくる強い信念をもった内容であることは間違いない。候補者の力量からいえば展示そのものがそれなりの美的な内容を獲得しうると思われるが、ただ全体のメッセージがやや使い古されえた「近代の喪失」というフラットかつノスタルジックな概念に帰着し、その歴史的本質、日本社会と建築との関係における反省的視座といったところに辿り着かないとの指摘もあり、インパクトは認められなかった。

杉本博司氏の案「Temple Atomic Catastrophe 白井晟一原爆堂」は、1954年に提案された白井晟一の「原爆堂」プロジェクトを再考し、そこに収蔵される予定であった丸木位里・俊夫妻の「原爆図」を実際に日本館に展示するという異色の内容である。同時代に建設された日本館はサイズの的にも原爆堂と共通する部分があり、この展示では日本館が原爆堂に見立てられ、実現しなかった丸木夫妻の原爆図の展示をヴェネチアにおいて行うという息の長いプロジェクトともなっている。今日のウクライナ戦争に際して原爆への危機感が実際のものとなっている状況を踏まえると、決して70年前の話ではなく、今日的な黙示録の表出とも思われる案である。いくつもの「カタストロフィー」の展示で賞を受けてきた日本館との相性も良さそうである。ただ、建築史的に考えると、同じ年に丹下健三の広島のパースセンターの案など、いくつもの原爆に対する建築的提案がなされており、戦後日本社会の状況を踏まえた展示としては弱いとの指摘が複数の選考委員から寄せられた。一方で、美術性はきわめて高く、この展示案は別のかたちでぜひとも実現してもらいたいとの応援の意見も出た。

候補者と選考委員との上記のようなやり取りを経て、プレゼンテーション後に選考委員5名による選考がなされた結果、大西麻貴氏を第一候補者（選考委員会としてタイトルへの疑問は残るとの留保事項がつく）、原田真宏・麻魚氏を次点として日本館展示キュレーターに推薦するに到った。